【論考】

地域の大学間で行う多文化クラスの試み

Designing Co-learning in Multicultural Class: An Attempt to Foster Collaboration between Universities in Akita

秋田大学国際交流センター助教[1]　**平田　未季**
国際教養大学日本語プログラム教授　**阿部　祐子**
国際教養大学専門職大学院グローバル・コミュニケーション実践研究科助教　**嶋　ちはる**
HIRATA Miki
(Assistant Professor, International Exchange Center, Akita University)
ABE Yuko
(Professor, Japanese Language Program, Akita International University)
SHIMA Chiharu
(Assistant Professor, Graduate School of Global Communication and Language, Akita International University)

キーワード：多文化クラス、大学間の合同授業、地域活性化と留学生

１．はじめに

日本の留学生の大半は東京や大阪を中心とする都市部に集中しているが、地域でもその数は増え続けている。秋田県でもここ 10 年で留学生が倍増し、2017 年 10 月には 462 名に達した（2007 年 10 月は 229 名）[2]。留学生の所属校は、秋田大学が 215 名、国際教養大学（以下、AIU）が 212 名であり、両大学合わせて県全体の 9 割以上を占めている。

秋田大学、AIU で日本語教育に携わっている筆者らは、秋田における留学生の日常の生活環境について以下の問題を感じていた。1 つ目は、行動範囲の狭さである。秋田県は、県庁所在地である秋田市も車社会であり、駅周辺や徒歩でアクセス可能な市中心街に商業施設や娯楽施設がほとんどない。公共交通機関の利便性も低く、特に市内のバスは多言語対応が進んでいないため、かなり日本語力が高くなければ使用しにくい。その結果、留学生は、日常のほぼすべての時間を大学周辺と大学に近接する寮で過ごしている。

2 つ目は、交流範囲の狭さである。秋田大学が実施している留学生活に関するアンケート調査では、多くの留学生が日本人学生のコミュニティに入ることの困難さを問題として指摘し、日本人の友人が

[1] 所属は執筆時。
[2] 「秋田県内留学生等の受入れの推移」『あきた留学生交流』第 30 号（2018 年 2 月、秋田地域留学生等交流推進協議会事務局 発行）

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

できないことを悩みの上位に挙げている。さらに、上述のように行動範囲が狭い地域の都市においては、学外で留学生同士の交流ネットワークを広げることも困難である。秋田の留学生の 9 割が所属する秋田大学と AIU は、どちらも秋田市に位置するものの、秋田大学が市中心部に位置するのに対し、AIU は公共交通機関でのアクセスが困難な郊外にあり、両者の生活圏は重ならない。そのため、都市部のようにアルバイト先や中心街の娯楽施設で他大学の留学生と知り合う機会はほぼない。また、これまで大学主導の交流活動もほとんど行われてこなかった[3]。

以上の現状を改善するため、筆者らは、2016 年から 2017 年にかけて、秋田大学と AIU の日本語科目の中で合同授業を 2 回実施した。目的は、ともに秋田で生活する留学生が、秋田の異なる大学生活を知り視野を広げること、交流を通じて学外のネットワークを構築することの 2 つである。本稿では、1 回目の合同授業を取り上げ、その概要を紹介した後、先行研究との比較に基づき、本実践の特色を述べる。さらに、1 回目の合同授業で AIU 生の受入れを行った秋田大学生の感想をもとに、大学間の合同授業から参加学生が得うる学びについて考察する[4]。

都市部のみならず、地域でも留学生の受入れが増加している現在、各大学は学内の学習環境・生活環境の整備に尽力しているが、その取り組みは個々の大学の中で完結しがちである。筆者らは、行動や交流の範囲が制限される地域で過ごす留学生にとって、大学を超えた合同授業が、日常の環境に対する彼らの意識を変える有効な活動となりうる可能性を指摘する。

２．本取り組みの特色

2.1　合同授業の概要

秋田大学と AIU の留学生は、秋田で留学生活を送っているという共通点を持つが、彼らが日常のほぼすべての時間を過ごす大学内の生活・学習環境は大きく異なる。秋田大学では、全学生約 5,000 名中、留学生は約 200 名であり、全体の約 4%である。内訳は、協定校からの交換留学生 2 割、学部生 4 割、研究生・院生 4 割であり、出身地別では東南アジア出身者が 40%、東アジア出身者が 31%で、全体の 7 割以上を占める。学内はほぼ日本語のみの環境であり、留学生が履修可能な教養科目のうち英語で行われているものは 4、5 科目にとどまる。

一方、AIU では、全学生約 900 人中、留学生は約 200 人で全体の 20%を超える。留学生は 9 割以上が交換留学生である。AIU では留学生にも受入れ条件として一定の英語能力が課されるため、その 7 割以上が欧米出身である。外国人教員の割合も 5 割を超え、大学の授業のほぼ全ては英語で開講されている。そのため、中級以上の日本語能力を持つ学習者は少ないが、学内は英語環境であり、日本語が

[3] 秋田県には、県内の大学・高等専門学校、公共団体、経済団体、国際交流団体等から成るコンソーシアム「秋田地域留学生等交流推進協議会」があり、唯一この会が、秋田の留学生間の交流を促す事業を行っている。
[4] 2 回目の合同授業の概要、AIU 生の感想については、平田・阿部・嶋（2018）を参照。

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

できなくても困ることはない。

先述の通り、秋田県の留学生の 9 割は秋田大学もしくは AIU に所属しているが、両大学の学生は生活圏が隔たっていることもあり、これまでほとんど交流がなかった。筆者ら（秋田大学の教員 1 名と AIU の教員 2 名）は、この状況を改善すべく合同授業を企画・実施した。先述の合同授業の目的を以下にまとめる。

(1) 合同授業の目的

a. 秋田の異なる大学生活を知り視野を広げること

b. 交流を通じて学外のネットワークを構築すること

合同授業は 2016 年から 2017 年にわたり 2 回行われたが、紙幅の都合上、本稿では 1 回目の合同授業のみを紹介する。1 回目の合同授業は 2016 年 9 月から 11 月にかけて実施された。表 1 に参加者の概要を示す。

表 1　参加クラスの概要

	秋田大学	AIU	
クラス	中級コミュニケーション	中上級会話	上級聴解
回数	週 1 回　90 分×15 回（うち合同授業準備 4 回分、合同授業 2 回分、振り返り 1 回分）	週 1 回　75 分×15 回（うち合同授業準備 4 回分、合同授業 3 回分、発表 1 回分） ＊合同授業に関する部分は 2 クラス合同で実施	
学生数（内訳）	25 名（中国 14 名、韓国 8 名、台湾 1 名、イスラエル 1 名、ケニア 1 名）	8 名（韓国 2 名、台湾 1 名、マカオ 1 名、シンガポール 1 名、タイ 1 名、ノルウェー 1 名、ロシア 1 名）	3 名（台湾 3 名）

第 1 回目の合同授業では、AIU 生が秋田大学を訪れ、秋田大学生がホストとして秋田大学と寮を含む大学周辺を紹介した。合同授業の目的から考えれば、参加学生が両大学を行き来するのが理想であるが、時間・交通手段の制約により、1 回目は試験的に一方向的な交流を実施した。

表 2 に準備段階を含む合同授業の流れを示す。秋田大学と AIU の参加学生は 7 つのグループに分けられ、事前にオンラインでやりとりをした後、合同授業当日に対面し、グループ毎にキャンパスツアーを行った。ツアーには、近隣の飲食店で昼食をとる時間も含め、その間互いの大学や生活環境の違いについて、事前に準備した質問をもとに自由に話をしてもらった。

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

表 2　合同授業の流れ

<table>
<tr><th></th><th>秋田大学</th><th>AIU</th></tr>
<tr><td>9 月</td><td></td><td>準備 1 回目
・合同授業について説明、グループ分け
・【授業外】秋田大学について簡単に調べ、自分達の発表のテーマや質問を考える</td></tr>
<tr><td rowspan="2">10 月</td><td>準備 1 回目
・合同授業について説明、グループ分け</td><td>準備 2 回目
・発表のテーマについてアイデア共有
・【授業外】メールで秋田大学生と連絡を取る</td></tr>
<tr><td>準備 2 回目
・AIU 生に自己紹介のメールを送る
・【授業外】食べ物の好みを聞き、昼食の場所を提案する</td><td>準備 3 回目
・テーマの確定
・【授業外】メールで秋田大学生と連絡を取る
＊課題：自己紹介、グループ名を考える</td></tr>
<tr><td rowspan="4">11 月</td><td>準備 3 回目
・グループ毎に AIU からの質問を読み、当日のプランを考える(案内する場所、昼食を食べる場所、その順番)</td><td rowspan="2">準備 4 回目
・秋田大学生への質問の確定、メール送付</td></tr>
<tr><td>準備 4 回目
・紹介のリハーサル</td></tr>
<tr><td colspan="2">合同授業当日
アイスブレーキング、グループワーク（キャンパスツアー、昼食）、成果共有</td></tr>
<tr><td>振り返り</td><td>振り返り</td></tr>
</table>

本実践は、秋田大学と AIU の日本語科目の一部として行われたが、生活環境や文化的な背景が異なる者同士が授業を通して交流し気づきや学びを得ることを目的とするという点で、多文化クラスの 1 つと位置付けられる。大学で行われる代表的な多文化クラスとしては、学内の多文化共修授業、遠隔交流授業、地域との交流授業の 3 つがある。以下、これらとの比較に基づき、本実践の特色について述べる。

2.2　学内の多文化共修授業

留学生の増加とともに、多くの大学が教養科目として多文化共修（あるいは多文化交流、国際共修、共同学習）を目的とする授業を開講している。これらは、ディスカッション等を通じて「異なる言語・文化圏を背景とする者同士が自他の文化を比較しつつ学ぶ授業」（岩井 2006、佐藤他 2011）と定義されるが、最大の特徴は、学内の日本人学生と留学生の交流を主な目的の 1 つとする点にある。その背景には、学内で留学生が増加しているにもかかわらず、働きかけがなければ日本人学生との接触・交流が進まないという現状、そして留学生をリソースとして学内の国際化、多文化教育を促進しようという動機がある（坂本 2013: 144、小松 2015: 166）。

学内の多文化共修授業のメリットは、同じ大学に所属する留学生と日本人学生が実際に教室で対面し、直接交流を行うことができる点だと思われる。しかし、同時に、多文化共修授業は学内の日本人

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

学生と留学生の非対称性を強化する可能性も含む。多文化共修授業における活動は、「日本人学生と留学生の交流」という目的のため、「日本人学生」と「留学生」、もしくは「日本人」と「〇〇人」の間の文化、視点、意見の違いを強調するデザインになる傾向がある。また、日本人と留学生が対等な立場で交流することをうたいながら、多くの場合日本語を媒介語とするため、留学生の中には、3 節で後述する通り、「日本人学生」に対し「留学生」である自己を日本語力が劣るものとして相対化し、自己否定的な構えをとる者もいる。

本実践では、この点を考慮し、参加学生の視野を広げるという目的達成のために、それぞれの出身地域や文化ではなく、留学先である大学の違いに焦点を当てた活動を企画した。これにより、参加学生は、普段期待される「留学生」、「〇〇人」という役割を離れて交流することができる。また、参加者ができる限り対等な立場で交流できるよう、日本語力がほぼ同レベルのクラスを合同授業の対象とした。

2.3　遠隔交流授業

情報通信技術の発展とともに、従来の TV 会議システムに加え、スカイプ等インターネット上の電話サービスでの音声・映像のやりとりも容易になった現在、異なるキャンパス間や都市間、さらには国をまたいだ遠隔授業の実践はもはや珍しいものではない。日本語教育の現場では、多文化交流の一環として、海外の大学の日本語学習者と国内の日本人大学生との遠隔授業の実践例が見られる（森山 2010、張・劉・大橋 2018 等）。

遠隔交流授業は、交流の動機付けという点で大きなメリットがある。異なる地域に住む参加者間では互いの生活環境や文化的背景の異なりが明確であるため、相手への興味関心がわきやすい。もう一点、学内の多文化共修授業とは異なるメリットとして、森山（2010）は、参加学生間の関係性がフラットであることを挙げる。遠隔授業では、どちらも自国（ホーム）にいながら交流ができるため、日本語が媒介語であったとしても、マイノリティ・マジョリティという不平等な関係性が生じにくく、対等な立場で交流ができる（同上、p. 167）。逆に言えば、2.1 節で言及した学内の多文化共修授業は、開始時点でマイノリティ・マジョリティという関係性が前提となっていることに留意すべきであると思われる。一方で、森山（2010）は、遠隔交流という形態には、実際に同じ教室で学ぶことができる学内の多文化共修授業と比べ、参加学生が直接接することができないという限界があることも指摘している（張・劉・大橋（2018: 61）も参照）。

筆者らは、本実践も、遠隔交流授業と同様に、交流の動機付け、参加者間の関係性という点でメリットを持つと考える。本実践は、異なる大学間の交流であるため、交流相手には新規性があり、交流の動機付けが生じやすいと思われる。同時に、参加者は全員が‘アウェイ’である秋田で学ぶ留学生なので、マイノリティ・マジョリティという非対称的な関係性は生じないことが予測される。それに

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

加えて、本実践では、遠隔交流授業とは異なり、直接の対面交流が可能である。さらに、参加者は同じ地域で生活をしているため、授業で関係性が構築されれば、交流が授業外に広がる可能性もある。このような交流の日常への還元は、(1b)でも言及した通り、教員らが合同授業の成果として最も期待する点の 1 つである。

2.4　地域との交流授業

留学生とその居住地域の自治体・住民との交流は、大学による地域貢献の一環と位置付けられ、多くの大学・地域で盛んに行われている。秋田県においても、留学生の増加に伴い、ここ数年で、県内の各自治体との交流プログラムが大幅に増加した[5]。これは、大学主導で行われるものと、各自治体からの要請に基づいて行われるものとの二つに分けられるが、どちらも、留学生と地域住民との直接交流を通して、自治体においては住民の国際理解を促進し多文化共生の意識を高めること、大学においては留学生に留学先である地域への理解を深めてもらうことを主な目的としている。さらに、ここ数年では、伝統行事への参加、インバウンド促進のためのモニターツアーへの参加等、より実質的な地域活性化事業への協力も増えている。

留学生と地域の住民との直接交流は、物理的に同じ地域に住む両者の共生のために重要であり、筆者らも秋田で多くの実践を行っている（阿部 2018a、平田 2018 等）。一方で、このような交流の多くは、非日常性、参加学生の役割の固定化という課題を含んでいる。多くの場合、地域との交流は留学生の生活の場からバス等で移動した上で、イベントや年中行事といったいわゆるハレの場への参加という形で行われることが多い。普段の生活圏を離れることは、行動範囲が限られる地域の留学生にとって貴重な気分転換の機会であるが、同時に、留学生にとっても地域住民にとっても、交流が、普段の生活から切り離された非日常的なものにとどまる可能性がある。2 つ目に、2.2 節で述べた学内の多文化共修授業と同様に、地域との交流においても、参加学生に期待される役割は固定化されがちである。地域との交流授業において、参加学生は常に外から来て地域に受入れられる「お客様」であり、地域の国際理解を促進するため、または伝統行事やインバウンドの活性化のため、「留学生」、「〇〇人」として振る舞うことが強く期待される[6]。

本実践は、留学生が普段の生活のほぼすべての時間を過ごす大学を交流の場とする点、留学生に受入れ役として交流を主導する役割を付与するという点で上の活動と大きく異なる。このような日常の延長としての交流は、参加学生が新たな視点から普段の生活の場を見つめる契機になると思われる。

---

[5] 秋田大学は連携を持つ県内の 2 つの市と、AIU は交流協定を持つ県内 8 市町村と、通年に渡り国際交流事業を行っている（2017 年度は、秋田大学は延べ 168 名が参加、AIU は延べ 572 名が参加）。その他に、両校とも、県内各教育機関や各種自治体・団体の要請に応じ、児童・生徒や地域住民との交流、伝統行事・モニターツアーへの参加等を定期的に行っている。

[6] 地域との交流における非日常性、留学生の役割の固定化は、ともに地域で暮らす「生活者」としての留学生を背景化してしまう恐れがある。

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

３．１回目の合同授業に対する秋田大学生の反応

2 節で述べた本実践の特色を(2)にまとめる。

(2) 異なる大学間の多文化クラスの特色

a. 留学生同士が対等な関係性で交流を行うことができる

b. 直接対面での交流が可能であり、授業外につながる関係性構築も期待できる

c. 普段の生活の場で日常の延長として交流を行うことができる

d. 普段学内外で期待される「留学生」、「〇〇人」という役割を離れて交流を行うことができる

では、実際に参加した学生は、このような形態の授業から何を学ぶことができたのか。本稿では、1 回目の合同授業で受入れ役を務めた秋田大学生の合同授業に対する感想に注目して考察する。秋田大学側の担当教員は、合同授業に参加した「中級コミュニケーションクラス」の受講生 25 名中 18 名に、学期終了後（2017 年 2 月）インタビューを行った[7]。インタビューでは、コミュニケーションクラスに期待することと実際に行われた活動に対する感想について、1 人 20～30 分ずつ話してもらった。以下、彼らの語りをもとに、参加学生が合同授業から得た学びを 4 つに分けて考察する。

3.1　内容志向の交流

インタビューの冒頭で、教員は各学生に、どのような内容を期待して日本語のコミュニケーションクラスを履修したのかとたずねた。その結果、ほぼ全員が*「自然な日本語」*[8]、*「日本人らしい話し方」*の習得を期待していたと答えた。彼らは中級から上級の日本語力を有し、日常生活に支障のないコミュニケーション能力を持つが、*「普通の会話はできるが、日本人らしい話し方は下手」*という意識を持ち、アウトプットに対する教員の細かなフィードバックや日本人学生との会話等、*「外国人ではないと相手が感じられるような」*日本語母語話者らしい話し方を身につけられる活動を期待していた。

「生活の特定の場面で日本人が使う言葉を学びたい。（中略）他の日本人の真似をして（話すと）、外国人ではないと言われます」（中国・男性）

一方、クラスの半分近くの時間をかけて行われた AIU との合同授業は留学生同士の交流であり、彼らの期待とは異なる活動である。実際に、参加学生の一部は、AIU との活動は自分が期待した日本語の学習には寄与しなかったと述べた。

「AIU の学生のほかの、日本人の人と会って話す機会がもっとあれば良いだろうと思います。せっか

[7] 学期終了後すぐに帰国した学生もいたため、全員にインタビューを行うことはできなかった。

[8] 以下、インタビューからの抜き書きを「」を付した斜体で表す。一文以上を引用した場合は改行し、学生の属性を加えた。なお、括弧内はインタビューの文脈をもとに筆者が加筆したものである。下線も筆者による。

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

く日本だから。私の場合では、なんか、外国人だから、心の中で私が話していることが正しいかなーと心配があるので。そんなことがあるから、日本人と話していろんなことを学ぶ方がいいだと思う」（韓国・男性）

これらの語りから、参加学生は、大学および秋田における自らを、少なくとも言語面において欠けたところのある存在と捉え、日本人学生との交流から完全な「日本人」のあり方に近づきたいと考えていることが分かる。このようなニーズを持つ彼らが期待する授業内の日本人学生との交流とは、コミュニケーションの媒介語である日本語に焦点を当てたものである。実際に、参加学生の中には、交流相手である日本人学生を、自らの言語学習のリソースとして捉えている者もいた。

「(学内の多文化共修クラスでは多くの日本人の友人ができるが)でも、まあ artificial friendship かな。そんなに深くない。でも私は、日本語の練習のためなら普通の関係でもいい。普通な関係から日本語の practice、練習できました」（ケニア・男性）

一方で、参加学生の大半は、AIU との合同授業を、自らのニーズとは異なる活動だと感じながらも好意的に評価した。その理由として、多くの学生は、AIU 生との交流で、秋田の生活情報、異なる大学環境や日本語授業、日本語の学習法等、留学生として興味深い情報を共有することができたという点を挙げた。ここから、彼らは、AIU 生との交流においては、日本語ではなく交流の内容に焦点を当て活動に参加していたことが分かる。これは、彼らが望む日本語に焦点を当てた交流ではないが、多くの学生は、交流から得られた情報、もしくは内容志向の交流を経験したこと自体が、コミュニケーションクラスで得るにふさわしい学びだったと述べた。

「日本語の勉強というより、その交流の勉強になりました。(コミュニケーションのクラスでやることは）賛成です」（中国・女性）

「私はこのクラスで、前は AIU の学生と一緒に交流する、この形がとても良いと思います。みんなで違う場とか教え方とか交換できるし、違う専門から、なんか授業の行い方もいろいろ勉強しました」（中国・女性）

「日本語の勉強ではない。でも、AIU の生活、彼らがどのように日本語を勉強しているのか知ることができてとても勉強になった」（イスラエル・男性）

「私はあの時の AIU という活動がいいと思う。その活動でみんな一緒に話して、生活、秋田で体験したことでいろいろな話をして、みんな知り合いになって、それは一番良いと思います」（中国・女性）

「秋田の中にある大学ですけど、結構違うところがいっぱいあって、それを話し合ったことが面白かった。(AIU は）聞いたことはあるんですけど。今回 AIU の学生さんが来て、なんとなく詳しく知ろうと思いました」（韓国・男性）

このような留学生同士の交流はもちろん学内でも可能である。実際に、秋田大学の日本語科目でも、

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

ディスカッション等受講者間の交流を目指した活動は頻繁に行われている。しかし、インタビューからは、学内で常に一緒にいる学生とでは交流の動機付けが得にくいことが窺えた。

「学校では（いつも）会う人だけで、話したとしてもなんかちょっと普通の対話しかなかったですけど、AIU の学生達は初めてだから、いろんなことが話すことができて、とてもいいでした」（韓国・男性）

2.3 節で述べた通り、特に内容志向の交流において、交流相手に新規性があることは、交流の動機付けにおいて有効であることが分かる。

3.2　留学生という共通性がもたらすメリット

AIU との交流が内容志向になった理由の 1 つとして、新規性のある相手への興味関心とともに、留学生同士だから*「遠慮なく日本語がいっぱい話せた」*という点を挙げた学生も多かった。

「(AIU 生と話すときは）楽しかったです。緊張しませんでした」（韓国・男性）

「(AIU との）授業ではたくさん話せたのがすごく良かった」（中国・女性）

「韓国人と中国人、外国人一緒に。外国人一緒に話したら、日本語不自然に話せます」（中国・女性）

2.2 節では、日本語を媒介語として日本人学生と留学生が交流する場合、言語的な非対称性から留学生がコミュニケーションに不安を感じる可能性を指摘した。実際に、秋田大学生からは、学内の多文化共修授業等で日本人学生と話すとき、*「緊張する」*、*「『が』と『は』の混同とか文法的なことが気になる」*という声が聞かれた。これに対し、留学生同士なら、言語面を過剰に意識せず*「日本語不自然に話せ」*るため、コミュニケーションをより楽しむことができ、内容志向の交流につながったと考えられる。

また、2.1 節では、日本人学生との多文化共修授業の課題として、言語的な非対称性に加え、参加学生の「留学生」、「〇〇人」という役割が前景化されることを挙げた。これは、2.4 節で指摘した通り、地域との交流授業においても生じる課題である。インタビューにおいて、数名の学生は、このような役割からの意見発信を頻繁に期待されることについて言及し、AIU 生との交流の良い点として、「〇〇人」ではなく個人として日常の生活について話せたことを挙げた。

「自分の国の文化とか全然わからない。全然分からない。なんで？分からない。(中国の留学生として）そういうことを期待されて話すのは大変。（中略）話したい。自分の生活とか、（聞き取れず）とか。自分の国の文化とかはたぶん知らない。もっと普通の生活のことを話したい」（中国・女性）

「いつも国のこととか文化のことなので、(今回のような）生活に近いなそういうコミュニケーションの方がおもしろいと思います」（韓国・男性）

もちろん、留学生の中には、自らが出身地を代表する存在であることを意識し、「〇〇人」としての立場からの意見発信を積極的に行う者もいる。ただし、多文化共修授業や地域との交流授業等、多文化

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

交流をうたう活動の多くが、日本人学生や地域住民の学びのために、留学生の一面のみに焦点を当て、学内外における彼らの役割を固定化する可能性を含んでいることは、担当教員が十分に留意すべき点である。上述の語りは、実際にその現状に不満を感じる学生がいることを示していると言えるだろう。

3.3　学外のネットワーク構築

3.1 節、3.2 節で紹介した学生の声から、先に(2a,c,d)として示した本実践の特色が有効に機能し、交流が参加学生の視野の広がり（(1a)）につながったことが分かった。ただし、本実践のもう 1 つの目的である学外ネットワークの構築（(1b)）については、1 回の合同授業では期待したほどの成果は得られなかった。事前にグループ毎にオンラインで準備活動を行わせたこともあり、参加学生の大半は SNS でのつながりを保っていたが、頻繁に連絡を取り続けている者はごく一部であった。

「(今でも) LINE でいつも連絡しています。「そっちの学校はどうですか？」というあいさつと「今何をしていますか？」という普通の対話」（韓国・男性）

「今あまり連絡はとっていない。ただ、Facebook で友達になった」（中国・女性）

「activity の 1 週間後は「ありがとうございました」とか連絡しました。でもその後はあんまり」（ケニア・男性）

さらに、合同授業後、学外で実際に会うまでに至った学生は、以下の 2 名のみであった。

「AIU 生との活動では、日常会話の勉強はあまりできないけど、AIU 生との活動はとても良い。本当に友達になれる。今でも連絡をとっている。一度だけ外で会った」（中国・男性）

「(コミュニケーションクラスの中で) 一番面白いの部分はあの AIU の。それは一番面白いだと思います。友達ができることができます。まだ連絡をとっている。会うこともある。韓国やタイの人」（中国・女性）

学外での交流に至るほどの関係性が構築できなかった理由として、学生の多くは、対面での交流時間の短さを挙げた。

「自由活動の時間を増やしたいです。その時間は短いので、みんなもう親しくなったばかりで、離れます」（中国・女性）

解決策としては、ほぼすべての学生が、*「(もう一回) 会った方が面白い」*、*「今後も（合同授業を）やった方がいいと思います」*等、合同授業という枠組みでの交流の継続を望んだ。以上から、当初目指した、普段の行動範囲を超える学外ネットワーク構築のためには、教師主導の活動がある程度継続されることが必要だと分かった[9]。

9 インタビューでは、合同授業で同じグループだった AIU 生に市内で偶然会ったという経験を語った学生もいた。

「AIU 生との交流はとても良かった。新しい友達ができるから。今でも連絡を取っている。偶然、秋田市で会ったこともある」（イスラエル・男性）

これは能動的な交流ではないものの、筆者らが期待した授業経験の日常への還元であり、同じ地域に住む者同士ならではの交流の形だと考える。

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

3.4　「ウチ」のコミュニティ意識の変化

一方で、筆者らの当初の予測とは異なり、インタビューでは、合同授業を通じて学外の AIU 生との交流ではなく、逆に秋田大学生内の交流が深まったという声が複数聞かれた。その背景には、秋田大学でともに授業を受けていても、来日当初に形成された出身地のコミュニティを超えた交流は難しいと多くの学生が感じているという現状があった。

「実はなんか、今中国人の学生の間、中国人だけ知り合っています。のような感じです。韓国人とか他の国の学生とかあんまり交流していないです。私はそう思います」（中国・女性）

「（クラスで）いつも隣の人一緒に同じグループで（座ってしまう）。前と後ろの人とか（も同じグループの人）。後ろの人じゃない。前の人じゃない。違う人と一緒に話したい」（中国・女性）

彼らからは、合同授業のためのグループワークによって、学内の他の留学生とより深いコミュニケーションをすることができ、それが授業外の交流につながったという意見が出た。

「(AIU 生との活動で) 困らなかった。私のグループの A さん、話すことが好きです。分かりました。助けてくれた」（中国・女性）

「実はその後、AIU の人、あまり連絡をとらないです。でも、自分のクラスの他の国の、B さんとか C さんとか友達になりました。一緒に遊びに行きたいと来ました」（中国・女性）

なぜ、合同授業を通して、普段の学内の授業では超えられなかったコミュニティの境界が崩れたのか。1 つの可能性として、AIU 生という「ソト」に位置する者が加わったことで、相対的に秋田大学側の参加学生に「ウチ」という意識が生じたためだと考えることができる（阿部 2018b: 58）。秋田大学を訪れた AIU 生に対し、協働して自分達の生活の場を紹介することで、参加学生の間に「秋田大学生」という意識が生じ、それが従来のコミュニティの境界を超えるほどの親密度の深化につながったと考えられる。

これに加えて、インタビューからは、「ソト」との交流を通じて、秋田大学生の意識にもう 1 つの予測しない変化が生じたことが窺えた。それは、秋田大学への愛着および帰属意識の高まりである。インタビューでは、驚くほど多くの学生が、キャンパスツアーで AIU 生が秋田大学を褒めたことに言及し、その対比として、AIU 生が開示した AIU の欠点を、交流で最も印象に残った点として挙げた。

「AIU の食堂とか、まずいとか。聞いて面白かった。自分は幸せだと」（中国・女性）

「秋田大学は（周りに）何もないと思った。でも AIU は山の中で熊が出ると聞きました。びっくりした。それに、レストランも全然ない。秋田大学は田舎だと思っていたけど、レストランもあるし駅に近いことです」（中国・女性）

「なんか、意外でした。（AIU 生から）秋田大学の寮はいいと。AIU の寮は 2 人とか同じ部屋で家賃もすごく高い。秋田大学の留学生で良かったと初めて思いました」（韓国・学生）

一度の交流で所属大学への意識が大きく変化した背景には、そもそも秋田大学の留学生の多くが、特

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

に来日初期に秋田や秋田大学に肯定的な感情を持っていないという状況がある[10]。加えて、秋田大学では、学内はほぼ日本語のみの環境であり、留学生は様々な面で周辺的な存在として扱われることが多い。インタビューの語りからは、AIU 生が秋田大学を評価したことへの驚きとともに、「ソト」との対比により、参加学生の中に秋田大学に対する肯定的な感情が生じ、それが「秋田大学生」というアイデンティティの形成につながった様子が窺えた。

４．考察

以上、本稿では、秋田大学と AIU の合同授業の概要を紹介し、受入れ側の秋田大学生が得た学びや意識の変化について考察した。2 節の（1）で示した通り、本実践は、参加学生が（1a）秋田の異なる大学生活を知り視野を広げること、(1b) 交流を通じて学外のネットワークを構築することを目的として行われた。結果、(1a)については、事前の予測通り、3 節の（2）で挙げた異なる大学間の多文化クラスの特色が有効に機能し、参加学生が対等な立場でコミュニケーションを行った結果、互いの環境について多くの学びを得たと感じていることが分かった。しかし、(1b) については、筆者らが期待した、普段の行動範囲を超えた交流ネットワークの構築までに至った学生はごく一部であった。

ただ、合同授業を通じて、秋田大学生の中に、これまでのコミュニティを超えた交流が生じる、秋田大学への愛着･帰属意識が高まるという変化も見られた。この変化は当初予測しないものだったが、合同授業を通じて、参加学生が、コミュニティに対する意識とは流動的なものであり、自らで変化させることが可能なものだと実感できたことは､本実践の大きな成果であったと筆者らは考える。また、合同授業を通じて、普段期待される「留学生」､「〇〇人」という役割ではなく、参加学生が潜在的に持つ「秋田の生活者」､「秋田大学生」､「AIU 生」等のアイデンティティが前景化された点も、本実践の成果の 1 つである。ただし、大学間の違いを強調しすぎることは、所属によるアイデンティティの固定化や、所属の異同による「ソト」と「ウチ」という新たな非対称的関係性を生じさせる恐れもある[11]。多文化交流を目的とするクラスが、参加学生に特定の役割を課し、それぞれのアイデンティティを固定化するデザインに陥っていないかという点については、筆者らを含め担当教員は常に留意する必要がある。

1 節で述べた通り、都市部とは異なり、地域では意図的に機会が作られなければ、普段の行動範囲やコミュニティを超えた交流は生じにくい。活動のデザインについては十分に考慮すべきであるが、本

[10] 平成 28 年度に秋田大学国際交流センターが交換留学生に対して行ったアンケートでは、回答者 40 名中、「留学先として秋田大学が第一希望だったか」という問いに対し、13 名が「いいえ」と回答し、第一希望の留学先として東京等都市部を挙げた。また、秋田大学を選んだ理由としては、「母国の大学が秋田大学を指定したから」という回答が最も多く、全体の 50%を超えた。

[11] その点を考慮し、2017 年度に行った 2 回目の活動では、活動デザインを大きく変え、交流において、大学ではなく、参加学生個々人が秋田で経験する場に焦点を当てた。詳細については、平田・阿部・嶋（2018）を参照。

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

稿で提示した大学間の合同授業は、行動範囲や交流範囲が制限される地域で生活する留学生にとって、大学外に目を向け、自分が所属しうる多様なコミュニティへのアクセス可能性を学ぶ貴重な機会になりうると筆者らは考える。地域でも留学生の数が増加し続けている今、秋田県においても、これまで留学生を受入れていなかった大学が受入れを検討し始めている。しかし、受入れの取り組みは個々の大学内で完結しがちであり、学外での「生活者」としての留学生の実情には意識が向けられにくい。各大学は、留学生を、地域や大学の国際化のリソースとするだけでなく、彼らの「生活者」としての側面に目を向け、日常の行動範囲や交流範囲を広げていくことについて考える必要がある。大学間の合同授業という枠組みは、地域の複数の受入れ機関が連携して留学生の生活環境を考える第一歩として有効であると思われる。

参照文献

阿部祐子（2018a）「学生観光サポーター養成の試み—留学生、日本人学生、行政職員の継続的協働活動の実践報告」『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル』10, 18-26.

阿部祐子（2018b）「留学生、日本人学生、地域社会の異文化交流による親密性の深化—ウチとソトの境界を流動的に捉え直すしかけづくり」『2018 年度異文化間教育学会 第 39 回大会発表抄録』10, 58-59.

張 晶・劉 潔・大橋眞（2018）「対話型国際遠隔授業の成果と課題について—青島理工大学と徳島大学との遠隔ネット交流の実例から」『大学教育研究ジャーナル』15, 55-64.

平田未季（2018）「地域をフィールドとするプロジェクトワークにおける学習者の学びと地域貢献」『秋田大学国際交流センター紀要』7, 51-77.

平田未季・阿部祐子・嶋ちはる（2018）「地域の大学間での合同授業の試み—秋田大学と国際教養大学の留学生による多文化クラス」『秋田大学国際交流センター紀要』7, 23-50.

岩井朝乃（2006）「日本人大学生の「文化的他者」認識の変容過程—多文化クラスでの異文化接触体験から（特集 異文化間教育の現在）」『異文化間教育』23, 109-124.

森山新（2010）「グローバル時代に求められる総合的日本語教育」『比較日本学教育研究センター紀要年報』6, 163-169.

佐藤勢紀子・末松和子・曽根原理・桐原健真・上原 聡・福島悦子・虫明美喜・押谷祐子（2011）「共通教育課程における「国際共修ゼミ」の開設—留学生クラスとの合同による多文化理解教育の試み」『東北大学高等教育開発推進センター紀要』6, 143-156.

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.